

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：14602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884029

研究課題名(和文) 帝国主義の衝突：大英帝国女性作家達による両大戦・大戦間期の大日本帝国の表象

研究課題名(英文) The Clash of Imperialisms: Representation of the Empire of Japan by British Female Writers across Two World Wars

研究代表者

雲島 知恵 (Kumojima, Tomoe)

奈良女子大学・理系女性教育開発共同機構・講師

研究者番号：50737434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、両世界大戦期及び大戦間期において大英帝国内で出版された女性旅行家・作家による日本旅行記を研究対象とし、日本の表象とそこに現れる人間関係を分析するものである。日英同盟の同盟国として共通の人間性を持って描かれる第一次世界大戦期から、日本の帝国主義活動が進む中で「戦闘機械」へと変わっていく日本の表象を追うと共に、旅行家らの社会的地位、訪日目的の違いや日本人との友愛を通して立ち現れる政治的言説に組み込まれ得ない個の繋がりを明らかにする。

研究成果の概要(英文)：This research investigates the representation of Japan by female travellers and writers in the British Empire across the periods of the two world wars. It outlines its shifts from a humane ally during the First World War to 'formidable fighting machines' through the Japanese imperial scheme with aggressive expansionism in Korea and China. It focuses on three writers, namely Elizabeth Keith, Priyambada Devi, and Ada Elizabeth Chesterton. It examines their writings in terms of gender, race, class, nationality, and occupation at the nexus of political ambitions of the two empires and personal relationships between the writers and their Japanese friends. The research opens up a new archive of long-forgotten writers and their Japan travelogues and contributes to such fields as literary criticism, postcolonial studies, and gender studies.

研究分野：英文学

キーワード：旅行記研究 女性学 20世紀 帝国主義 戦争文学 日本：英国：インド

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 英文学旅行記研究における研究対象としての日本の発見

過去 20 年間の英文学研究の国際的動向において、旅行記研究は新たな研究分野としてその地位を確立してきた。特にジェンダー学、ポストコロニアル研究への注目の高まりを受けて、英国女性の大英帝国被植地への旅行を題材とした旅行記の研究が進められた。しかし、大英帝国史との関連でアフリカ、インド、オセアニアに研究が集中する中、公的な植民地化を逃れた日本を舞台とする旅行記の研究は、英米の学会において見落とされてきた。

一方、日本国内においては、西洋人による日本旅行記研究には長い歴史があるものの、多くの場合、その関心は原書の翻訳、或いは政治・経済・学問的影響力のあった男性旅行家及び滞在者の政治史・個人史に集中してきた。その結果、一部を除いて、女性による旅行記の研究、特にその包括的研究は、未開拓の分野であると言わざるを得ない。また、既存の研究は外国人の日本論を参考とする日本像の再構築を目指す史学研究的なものが主流であり、旅行記を文学テキストとして分析する文学的視点からの研究は遅れを取っている。

### (2) 大正・昭和期の日本旅行記研究の遅れ

博士学位論文において明治時代の日本を訪れた英国女性旅行記を研究する中で、外交関係の変遷が日本像に与える影響、また作者と日本人との友愛が作り出す反言説について考察したが、その傍らで日英関係が激変する大正以降の日本旅行記に関する先行研究の遅れにも気づく。世界大戦というレンズを通すことで拡大して現れるジェンダーを読み解くと共に、そのフィルター故に研究の周縁に追いやられた女性作家達に焦点を当てることで、女性文学史への貢献も可能となる。

## 2. 研究の目的

### (1) 帝国の衝突とその中の「個」

第一次世界大戦から第二次世界大戦終戦までの 30 年間に当時の大英帝国において出版された女性作家の作品における日本の表象を分析する。同盟国から対戦国への両国の外交関係の変化が作家達の日本観とその描写にどのような影響を与えたのか、その言説の大枠の変遷を年代順に追うとともに、政治的領域/個人的領域の狭間に置かれた女性作家が、日本人との私的交流を通して、公の言説に対するどのような反言説を作り得たのか検討する。ジェンダー学とポストコロニアル研究を研究軸に、帝国列強の利害的衝突を政治・歴史・思想的背景とする、女性の「個」と国籍・人種の差異を越えた倫理的友愛の文学的発現を探る。

### (2) 周縁の声

大英帝国の辺境に生きる被植民地の女性作家が、アジア解放を謳い隣諸国への影響力

を拡大する大日本帝国をどう理解したのか読み解く。ポストコロニアル研究の視点から、第三者の目を通した日英関係、及び日本の文学的表象を追う。

## 3. 研究の方法

### (1) 関連資料の掘り起こし

先行研究が限られているため、出版された旅行記の収集を幅広く行うと共に、それらのテキストを歴史的・社会的文脈に正しく置くため、同時代の新聞、手稿等の関連史料も収集した。国立国会図書館(日本)、大英図書館(英国)、ボードリアン図書館(英国)、セントアントニーズ・コレッジ図書館、インド国立図書館(インド)、コルカタ大学図書館(インド)、ピッシュバロティ大学図書館(インド)等に赴き、国際的な調査を行った。より多様な視点から日本の表象を分析するため、日本人作家による英語での日本論も研究の対象とした。更に、日本人女性による英国論も分析の対象とした。

### (2) テキスト分析

Elizabeth Keith(1887-1956)、Priyambada Devi(1871-1935)、Ada Elizabeth Chesterton(1869-1962)の3名に焦点を絞り、テキストの精読を行った。それぞれ、*Eastern Windows: An Artist's Notes of Travel in Japan, Hokkaido, Korea, China and the Philippines* (1928)、"Priyambada Devi's Letters to Okakura" (1912-1913)、*Young China and New Japan* (1933)を主要テキストとしたが、同作家による別作品、及び関連作家による作品との比較分析も行った。

### (3) 戦争文学研究

両世界大戦開戦・終戦後の節目となる年を迎えた過去数年間、英文学分野においても戦争文学の研究が盛んに行われたが、本研究においては、Santanu Das が「第二波戦争批評」と呼ぶ時期を経て多様化した戦争批評理論を援用し、人種・国籍・社会的地位等で異なる立場に置かれた女性旅行家らの戦争参加及び戦争描写を考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 主な研究成果

#### 貴重な手稿等の史料の発掘

20 世紀前半の英国女性及びインド人女性による日本旅行記、また日本人作家による日本論、日本人女性による英国旅行記を調査する中で、初版後再版されていない数々の希少な作品群を発見すると共に、未出版の書簡等も発見した。

Elizabeth Keith の義兄である John William Robertson Scott が第一次世界大戦中に東京で設立した出版社「新東洋社」から 1917 年から 1918 年にかけて出版されていた月刊誌『The New East/新東洋』は、日英二言語で出版され、George Bernard Shaw や Rabindranath Tagore など国際的な著名人も寄稿すると共に、森鷗外などの日本人作家の

作品も英訳され掲載されており、当時の日本文学をいち早く英語圏の読者に伝えるという点で重要な役割を果たしていた。また、津田梅子による樋口一葉の作品の英訳や尾崎幸雄夫人尾崎セオドラ英子の都都逸訳等も掲載されており、当時の女性による文学翻訳活動を知る上で興味深い。新東洋社からは、1917年にKeithの風刺漫画集も出版されており、出版社の活動から、地理的に離れた日本で第一次世界大戦中の祖国への貢献に奔走する彼女達の姿が窺える。オックスフォード大学のセントアントニーズ・コレッジ図書館にはRobertson Scott 関連資料が所蔵されており、日本滞在中に警察から出された検閲書類が数点含まれており、Robertson Scott の日本でのジャーナリズム活動を考える上で重要である。

インド国立図書館で収集した 20 世紀前半にインドで出版された雑誌の日本関連記事は、日英両国を相対的に見つめる視点を与えてくれる。日本の女子教育に注目する記事が数点見られることは特記すべき事実であり、アジア諸国の中で唯一欧米列強と肩を並べる日本へのインドの関心の在り方を知る上で興味深い。

Devi のベンガル語による短編小説“Renuka” (1914) も、ベンガルの女性誌 *Manasi* の中に発見することができた。この作品は、Lafcadio Hearn の短編“Kimiko”の翻訳・改案による紹介であると見られるが、ベンガルの女性作家が、いかに日本人女性、特に芸者というある種特殊な職業の女性達をどのようにイメージし表象したのか、またベンガル女性らによって文学的想像世界でいかに享受されるようになったのかを知る上で非常に興味深い。

日本の表象の変遷: 「侍」「芸者」から「戦闘機械」へ

第一次世界大戦中に出版された 2 冊の著書 *Japan, Great Britain and the World* (1915)、*The Ignoble Warrior* (1915) の中で Robertson Scott は日本を「友」、「武士」として描き、大戦で戦う英国兵の「武士道」と独国兵の「非道」を比較する中で、日英の近似性を強調することで、読者の良心に訴えかける。一方、Devi は“Renuka”の中でHearnの作り上げた女性的な日本を芸者というモチーフを通してベンガル語空間に翻訳する。

戦間期に出版された旅行記においては、日本の表象は、著者と日本との関係、また著者の政治的理念、社会的立場等に大きく影響される。*Eastern Windows* においては、日本の韓国における植民地活動は影を潜め、日韓中比の市井の民の姿が彼女自身の手による木版画特有の穏やかさで提示される。しかし、第二次世界大戦後にKeithの姉である Elspet Keith Robertson Scott と Keith との共著として出版された *Old Korea* (1946) では、韓国の独立運動に焦点が移され、日本の侵略が批判的に描かれる。

満州事変後に出版された Chesterton の *Young China and New Japan* においては、タイトルからも明らかなように、成長の可能性のある有機的な存在として描かれる中国に対して、日本は、人間性を失った「戦闘機械 (fighting machines)」(306)として立ち現れる。これは、Chesterton が親中派であることも影響しており、そのことは、同時期に同じく日中を旅した Edith Lyttelton の *Travelling Days* (1933) との比較から明らかである。Lyttelton は彼女の日本での映画鑑賞体験を通して、日本人の隠れた感受性を、驚きを持って描いている。

忘却の彼方にある国際的女性の交流

本研究において取り扱った旅行記を通して、忘却の中にある幾つかの大正・昭和期の国際的な人間関係が浮かび上がってきた。

Keith の *Eastern Windows* が献呈されている人物の中に、Haru Matsukata の名前があるが、これは、後に駐日アメリカ大使ライシャワー夫人となる松方ハルのことであり、Keith が姉夫婦帰国後、松方正義の息子である松方正熊・美代夫妻の家に滞在したことがきっかけである。美代夫人は日米貿易の先駆者であった新井領一郎の娘であり、彼女達の繋がりから、当時の日英米のトランスナショナルな人間関係を知ることができる。また、同旅行記は Ada Alexandra Gale にも献呈されているが、彼女は王立アジア協会の韓国支部のカナダ人設立者 James Scarth Gale の娘である。後者による 17 世紀の韓国小説の英語訳 *The Cloud Dream of the Nine* の序文を担当したのは Elspet であり、ここから Keith 姉妹と韓国との繋がりが見えてくる。*Old Korea* には柳宗悦の名前も出てきており、支配者として一般化された日本の姿ではなく、日本内部の政治的・思想的多様性も映し出されている。ここから、日本による韓国の植民地支配を批判するトランスナショナルな知識人達の繋がりも浮かび上がってくる。

Devi と岡倉天心、そして Rabindranath Tagore との繋がり調査の中で、当時の日本人女性が繋いだインド及びインド人女性との繋がりも見えてきた。高良とみは全インド婦人会議に第二次世界大戦を挟んだ 1935 年と 1950 年に出席しており、Tagore とも親交があった。また 1937 年には Santa Devi というインド人女性が日本を訪れ羽仁もと子と交流し、自由学園を見学して、日本の女子教育に関する記事を *The Modern Review* に寄稿している。

(2) 研究成果の位置づけとインパクト

日英印関係の文学史的見直し

90 年代以降盛んに行われてきたポストコロニアリズム理論を援用しての旅行記研究の成果として英印外交関係と英文学との協働の分析が挙げられるが、そこに日本という別軸を加えることで、問題のさらなる複雑性が明らかになってきた。日英・英印・日印の三本の軸の交差点を文学、特に女性旅行家によ

る文学という観点から精読する時、政治外交史の研究及び二国間関係のみに焦点を当てた研究では見えてこない少数派の言説と人間関係が浮かび上がってきた。

#### 戦争文学研究への貢献

英文学研究において、ヨーロッパ中心主義的な研究が大半を占めてきた第一次世界大戦期、日米関係に焦点が当たる第二次世界大戦期に、日英印の關係に注目することによって、新たな文献に光が当てられた。

#### 女性文学史への貢献

従来文学的観点から研究されてこなかった女性旅行家らの日本旅行記に注目することによって、女性と文学活動に関する研究の拡大に貢献できた。

#### (3) 今後の展望

日英印關係に注目する中で、三国と他国との関連と、それらが作家と言説に与えた影響の重要性も見えてきた。帝国内の複雑な力関係と文学活動を見るためには、日英の二ヶ国語だけで研究を進めるのに限界がある。韓国語、ベンガル語などで研究を進める研究者との共同研究が望まれる。

旅行記における異文化間人間關係の読解を進めていく上での理論化が必要である。affect theory、共同体理論などの他分野の理論の応用を進めていくとともに、文学研究を通してそれらの理論の発展に貢献し、異分野間の相互交流・相互作用を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

雲島知恵、"Identity Destabilized: Isabella Bird in a Contact Zone"、Isabella Bird and the Poetics of Female Travel Writing、平成27年6月27日、東京大学本郷キャンパス(東京・文京区)  
雲島知恵、" 'Japan to me seemed not quite human' : The Representation of the Japanese Empire in British Women's Travel Writing during the Interwar Period"、2014 ELLAK International Conference Traveling Contexts: Cosmopolitanisms Old&New, East&West、平成26年11月20日、ソウル(韓国)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

雲島 知恵 (KUMOJIMA, Tomoe)  
奈良女子大学・理系女性教育開発共同機構・講師  
研究者番号：50737434